

Ⅲ ヒアリング調査からみた企業の声

1 製造業

(1) 一般機械器具

【景況感】

- ・半導体製造装置向けの受注は依然として低調で、前期と同様不況である。
- ・自動車関連をはじめ設備投資の動きが弱く、景況感は良くない。

【売上高】

- ・半導体製造装置向けの受注が低調であり、売上高は前期と変わらない。
- ・自動車関連で突発的な受注があり売上高は増えた。一方で家電関連など他の分野の受注はやや低調。
- ・得意先との間で今後の受注増を見越した戦略在庫の積み増しを継続しており、売上高は増えた。

【受注単価】

- ・受注単価は前期と変わらない。値上げをしたいが注文を失うおそれから得意先との交渉が進んでいない。
- ・受注単価は前期と変わらないが、得意先とのこれまでの交渉から年明け以降に一部値上げが実現する見込み。
- ・受注にあたっては同業他社との相見積もりとなることが多く、価格転嫁は思うように進んでいない。

【原材料価格】

- ・鉄、非鉄ともに高止まりしている。
- ・原材料価格は総じて上昇は落ち着いているが、下落する様子はない。

【採算性】

- ・売上は前期に比べ増えたが単価は改善しておらず、採算性は変わらない。
- ・生産設備の増強と安定生産による稼働率の向上から原価低減が図れ、採算性は改善傾向にある。
- ・受注量と単価ともにほぼ変化がなく、採算性は変わらず低調である。

【設備投資】

- ・生産効率化に向けて、自動の旋盤機と研磨機を導入した。
- ・このところ特段の設備投資は行っていないが、今後ワイヤー加工機の導入を検討している。
- ・導入を検討している機械はあるが、業績動向を踏まえて設備投資を控えている。

【今後の見通し】

- ・半導体市況は持ち直しの兆しが見えつつある。来年中には自社の受注も回復に向かうのではないかと見込んでいる。
- ・現状の受注予定では、来期は今期より売上が減少する見込みである。
- ・先行きは不透明で、具体的な見通しは立っていない。

(2) 輸送用機械器具

【景況感】

- ・自動車メーカーの生産回復から、受注環境は概ねコロナ前の水準に戻ったと感じている。
- ・中国経済停滞の影響等から受注量が減少しており、景況感は良くない。
- ・増加を見込んでいた大手メーカーからの受注は、まだ実際には動きがなく景況感は普通である。

【売上高】

- ・売上高は前期とほとんど変わらない。
- ・全体の売上高は変わらないが、新たな自動車部品製造の受注が増加傾向にある。
- ・中国経済停滞の影響から、売上高は前期比で5～10%減った。

【受注単価】

- ・受注単価はほとんど変わらない。
- ・新たな受注を獲得したことで受注単価は上がった。

【原材料価格】

- ・原材料の調達は問題なく行えているが、価格は高止まりしている。
- ・部品によっては年に約3回、1回あたり10～15%程度上がっているものもある。

【その他の諸費用】

- ・電気料金が若干下がり始めた。
- ・電力会社との契約の関係で電力の単価は上がったが、省エネ設備の導入で使用量は減っており、電気料金はほとんど変わらない。

【採算性】

- ・一部利益率の良い受注が増えたことで採算性は改善した。
- ・受注量が減少した中で受注単価はほとんど変わらず、採算性は悪化した。
- ・採算性はほとんど変わらない。

【設備投資】

- ・省人化に向け、溶接用のロボットを導入した。
- ・新しい規格の加工依頼に対応すべく、プレス機の導入を予定している。

【今後の見通し】

- ・足元の景況感は普通であり、当面横ばいで推移する見通し。
- ・来期にEV関連の受注が増える見込みであり、それに備え新たに旋盤機を導入する予定である。

(3) 電気機械器具

【景況感】

- ・半導体加工の受注が低調であり不況である。一方で、昨年後半から大きく落ち込んでいた半導体市況は底打ちの兆しがある。
- ・新規の受注が増えてきているが、コロナによる医療器具の特需の反動減を補い切れてはいない。景況感としては普通である。

【売上高】

- ・半導体加工の受注は依然として大きく落ち込んだままで、売上高は前期比でほとんど変わらない。
- ・EVなどに用いられるパワー半導体関連の受注は堅調に推移している。
- ・売上高は前年同期比では減っているが、新規受注の増加により前期比では10%程度増えた。

【受注単価】

- ・半導体基板加工の一部の受注について値上げ交渉を行い、受注単価が改善した。
- ・受注単価はほとんど変わらない。今後、足元の採算の状況を確認の上、価格転嫁交渉を行う予定。

【人件費】

- ・従来からパート社員の人数が多く、最低賃金引上げを受けて賃金水準の見直しを行い、人件費が増え

た。

- ・人件費は変わらない。業績動向を踏まえ、当面の賃上げは来年4月に予定している定期昇給のみ。

【原材料価格】

- ・前期比ではほとんど変わらないが、やや下降気味にある。

【採算性】

- ・一部の受注で単価の改善は図れているが、全体の受注量が落ち込んでおり採算性はほとんど変わらない。
- ・人件費が増加しその分の価格転嫁はできておらず、採算性は悪化した。

【設備投資】

- ・今年度中に計画していた設備投資は前期までに完了したため、今期、来期ともに設備投資は行わない。

【今後の見通し】

- ・半導体市況の底打ちにより、来年4月以降に受注動向は改善する見込み。
- ・得意先が増産を予定しており、良い方向に向かうとみている。

(4) 金属製品

【景況感】

- ・建設関連の受注は資材や人件費の高騰の影響から弱含んでいるが、家電関係は持ち直している。景況感としては普通である。
- ・医療機器メーカーなどの生産動向が弱く受注が低調であり、不況である。
- ・半導体製造装置関連の受注の落ち込みは底を打ったものの依然として低調であり、不況である。

【売上高】

- ・受注量は減少しているが、価格転嫁による値上げで売上高はほとんど変わらない。
- ・半導体製造装置関連の受注は低調であるが、他の分野で新規受注を獲得できており、前期比では売上高は増加した。

【受注単価】

- ・原材料費上昇分の価格転嫁により受注単価は上がった。
- ・一部の材料の値上がり分を価格転嫁したことで、受注単価は前期比で1%程度改善した。
- ・値上げ交渉に当たっては詳細なエビデンスの提出を求められ、また得意先によっては単価を年間契約で決めているところもあり、価格転嫁は進んでいない。

【原材料価格】

- ・価格の高騰は落ち着いたものの、鉄、非鉄ともに高止まりしている。
- ・ステンレスの価格は若干下がってきている。

【その他の諸費用】

- ・梱包材や洗浄に使う洗剤などの価格は上がっている。

【採算性】

- ・受注量の増加に加え、これまで行ってきた設備の増強や自動化の取組で生産効率が上がり、採算性は改善した。
- ・受注量が減少する中で値上げは一部にとどまり、採算性は悪化した。
- ・売上高や受注単価の動向に特段の変化がなく、採算性はほとんど変わらない。

【設備投資】

- ・工場の屋根に太陽光パネルの設置を行った。
- ・レーザー溶接機やCAD、見積もり自動化のためのソフトの導入を行った。

【今後の見通し】

- ・半導体製造装置関連の受注は来年度中には持ち直すとみているが、後ろ倒しになる可能性もある。
- ・例年、年末にかけて建設関連の受注が増えるが、建築資材や人件費の高騰の影響から見通しは不透明。

(5) プラスチック製品

【景況感】

- ・自社としては引き続き大手の得意先を始め引き合いが堅調で、好況である。業界全体としてはあまり良くはない。
- ・自社は比較的堅調だが、業界全体としての景況感は良くはない。特に住宅資材関係の動きが弱いと感じる。

【売上高】

- ・売上高は前期比で20%程度増えた。
- ・売上高は前期比ではほとんど変わらないが前年同期比では増えており、比較的堅調である。

【受注単価】

- ・コストの上昇分の価格転嫁はほぼできており、受注単価は変わらない。
- ・受注単価は上がった。価格転嫁については問題なく実施できている。

【原材料価格】

- ・樹脂原料を中心に高止まりしている。
- ・塗料の価格が上がっている。
- ・今年の前半までは上昇が続いていたが、それ以降は落ち着いた。

【人件費】

- ・業績が好調であり、賞与を過去最高水準に上げた。
- ・9月の定期昇給の水準を例年より上げた。
- ・最低賃金引き上げの影響はなく、人件費はほとんど変わらない。

【採算性】

- ・売上高、利益ともに好調であり、採算性は良くなった。
- ・採算性はほとんど変わっていない。

【設備投資】

- ・クリーンルームの新設と材料の脱着を行うロボットを導入した。

【今後の見通し】

- ・今後も景況感は良い方向に向かうとみている。
- ・業界全体の動きが良くはないことから、今後は悪い方向に向かうことを想定している。

(6) 食料品製造

【景況感】

- ・景況感は普通である。経済の正常化で需要はコロナ前の水準に回復しているが、原材料高や人手不足が慢性化しており特に小規模事業者にとっては厳しい状況にあると感じる。

- ・業界柄、好不況の波はあまりなく景況感はず変わり普通。ただ、人流の回復で飲食店や土産物関連の販売は堅調である。

【売上高】

- ・大手得意先をはじめとした OEM の受注が堅調で、売上高は前期比で増えた。
- ・例年売上げが増える時期であることに加え、価格改定による値上げで売上高は前期比で増えた。

【受注単価】

- ・受注単価は前期比で変わらない。得意先との値上げ交渉は基本的に年 1 回で、今年の分は既に実施済みである。
- ・9 月に実施した価格改定で 10% 程度の値上げを行った。

【原材料価格】

- ・原材料価格は前期比でほとんど変わらない。小麦は来年 1 月の価格改定で下がる見込みである。
- ・鶏卵は調達に問題は無いものの価格は高止まりしている。バターやマーガリンは品薄な中で価格もやや上がっている。

【人件費】

- ・人件費はほとんど変わらない。最低賃金引上げの影響は特に無い。
- ・人件費はほとんど変わらない。来年 4 月に給与体系の見直しを行い、支給水準を上げる予定。

【採算性】

- ・利益率の良い季節商品の展開や値上げを行ったことから、採算性は良くなった。
- ・売上高が増えた一方で価格転嫁が十分にできておらず、採算性は悪くなった。

【設備投資】

- ・作業効率化や資材のロス削減のために包装機を更新した。
- ・工場の屋根に太陽光パネルの設置を予定している。

【今後の見通し】

- ・原材料高は当面続くとみており、利益率の高い新商品の開発に注力していく。
- ・小麦の価格は下がる見込みだが、自社の商品の価格は据え置く方針である。

(7) 銑鉄鋳物

【景況感】

- ・自動車部品関連や公共工事関連の受注は比較的堅調だが他の分野は低調であり、やや不況である。
- ・大手得意先からの受注が堅調であり、好況である。

【売上高】

- ・受注の増加と価格転嫁により売上高は増えた。
- ・売上高はほとんど変わらない。

【受注単価】

- ・従来から原材料高騰分の価格転嫁は概ねできており、受注単価は前期比では変わらない。
- ・人件費も含めて価格転嫁をしたことで受注単価は上がった。

【原材料価格】

- ・主原料の銑鉄の価格は直近で下がってきている。
- ・原材料価格はこれまで上がってきていたが、足元では落ち着いている。

【人件費】

- ・賃上げにより人件費は増えた。
- ・前期比では変わらないが、今後賃上げにより人件費は増える見込み。

【採算性】

- ・売上げや受注単価に特段の変動はなく、採算性はほとんど変わらない。
- ・価格転嫁は順調にできており、採算性は若干改善した。

(8) 印刷業

【景況感】

- ・スクリーン印刷の受注が増えており、好況である。
- ・全体的にペーパーレス化のあおりを受けている状況は変わらず、不況である。
- ・景況感は普通である。

【売上高】

- ・前期に大きく売上げが増えたため前期比では減収であるが、受注動向としては堅調である。
- ・一部で値上げもできており、売上高は前期比で増えた。
- ・夏場は閑散期にあたるため売上高は前期比では増加したが、前年同期比では減った。

【受注単価】

- ・最近増えているスポットの受注は足元での材料価格などを踏まえて金額提示を行っているため受注単価は前期比で上がった。リピート案件の受注単価はほとんど変わらない。
- ・値上げにより受注単価は上がった。業界全体として以前より価格転嫁への理解は進んでいると感じる。

【原材料価格】

- ・紙やインクは価格が上がっている。
- ・原材料費は高止まりしている。

【採算性】

- ・採算性はほとんど変わらない。
- ・価格転嫁により採算性は前年同期比で良くなったが、前期比では変わらない。

【設備投資】

- ・スクリーン印刷用の乾燥機を導入予定。
- ・業績が低調であることを踏まえ、今期は設備投資を行わない方針。

【今後の見通し】

- ・得意先からの引き合いが堅調であり、良い方向に向かうとみている。
- ・ダイレクトメールなどの受注が減少傾向であり、悪い方向に向かうとみている。

2 小売業

(1) 百貨店

【景況感】

- ・宝飾品など高額商品の売れ行きが堅調であり、好況である。
- ・生鮮食品や冬物の衣料品の売れ行きが低調であり、不況である。
- ・都心の百貨店は好調だが、郊外店は厳しい情勢が続くとみている。

【売上高】

- ・外商含め宝飾品をはじめとした高額商品の販売が好調で、売上高は増えた。
- ・値上げの影響で客単価は上がり売上高は増えたが、客数は減っている。
- ・値上げに加えコロナ禍の巣ごもり需要が無くなり、生鮮食品の販売は低調である。

【諸経費】

- ・人件費、広告宣伝費ともに前期比で減った。
- ・広告宣伝費は低水準で維持しており、諸経費はほとんど変わらない。

【採算性】

- ・採算性はほとんど変わらない。
- ・衣料品販売が低調だったことから、採算性は悪化した。

【今後の見通し】

- ・現状の景況感是好況であり、今後も良い方向に向かうとみている。
- ・来期はバレンタインなどのイベントやセールなどで売上げは増える見込みである。
- ・先行きは不透明で、見通しは立っていない。

(2) スーパー**【景況感】**

- ・値上げの影響もあるが売上げは増加しており、好況である。
- ・国内景気は回復していると言われるが自社の事業としては実感が無く、不況である。

【売上高】

- ・前期に続き、客数、客単価ともに増加して売上高は増えたが、値上げの影響から販売点数は減少した。
- ・値上げの中でも総菜の売上げが好調で、既存店舗の新業態への転換も奏功し、客単価、販売点数とも増加し、売上高は増えた。
- ・値上げの影響により客単価は上がったものの、客数は減っている。

【諸経費】

- ・ベアを実施したことに加え、人員を増強したため人件費が増えた。
- ・ベアにより人件費が増えた一方で、広告費やキャンペーン等の諸経費を削減している。

【採算性】

- ・値上げの中で販売量も増加し、採算性は大きく改善した。
- ・節電をはじめとした経費の削減で採算性は良くなった。

【今後の見通し】

- ・現在は良いが、物価高による消費者の動向は読めず、人件費は増加傾向にあることから見通しは不透明。
- ・今後も引き続き良い方向に向かうとみている。

(3) 商店街**【景況感】**

- ・値上げによる買い控えの動きは一部みられるが、景況感としては普通である。
- ・商店によって状況は違うが、全体として景況感は普通。ただ物価高で仕入値が上がっても、なかなか値上げには踏み切れず、利益としては厳しい。

【来街者】

- ・イベントにより、休日を中心に来街者は増えている。
- ・来街者数はほとんど変わらない。

【個店の状況】

- ・物価高の中、各店で値上げをしているようだが、消費者の買い控えが起きているとはあまり感じない。
- ・良い商店と悪い商店で二極化が進んでいる。

【商店街としての取組】

- ・ポイントカードのスマホアプリ化を検討している。
- ・近隣の商店街と共通のLINEアカウントを活用した情報発信に注力していく方針。
- ・イベントが盛んに行われている。コロナ禍で開催を見合わせていた「まちゼミ」も再開している。

【今後の見通し】

- ・物価高が長引いており、悪い方向に向かうとみている。
- ・先行きにあまり期待は持てず、どちらともいえない。

3 情報サービス業

【景況感】

- ・DX化ニーズの高まりや半導体供給の改善などから引き続き好況である。
- ・国内経済が回復する中で自社の業況も以前より持ち直しているが、人手不足を懸念している。景況感としては普通である。

【売上高】

- ・システム開発の受注が好調であり、売上高は前期比で増加した。
- ・売上高はほとんど変わらない。世界情勢が不透明で、大手中心に設備投資を見合わせている様子がある。

【製品価格】

- ・材料費、運搬費の上昇分を価格転嫁したことで、受注単価は上がった。
- ・得意先に値上げ交渉を行っており、未だ十分ではないが受注単価は上がった。

【採算性】

- ・価格転嫁の進展に加え、不採算部門からの撤退により、採算性は改善した。
- ・価格転嫁は一部にとどまり、全体の採算性はほとんど変わらない。

【今後の見通し】

- ・引き続き今後も良い方向に向かうとみている。
- ・長引く物価高や地政学リスクの高まりから、今後の見通しは不透明である。

4 サービス業（旅行業）

【業界の動向】

- ・インバウンドの影響もあり観光地は休日、平日問わず活況で、コロナ前を上回っている印象。
- ・行事の再開で学校関係等は動きが戻ったが、一般の団体旅行はコロナ前には届いていない。

【景況感】

- ・引き続き好況である。

【受注高】

- ・観光やバス送迎の受注が堅調で、売上高は前年同期比で約3倍になっている。

【受注単価】

- ・バス運賃の改正により、受注単価は前期比で上がった。

【人件費】

- ・人件費はほとんど変わっていないが、人員を新たに1名採用予定であり来期は増える見込み。

【採算性】

- ・受注増加とバス運賃改正による受注単価の上昇で、採算性は改善した。

【今後の見通し】

- ・観光需要は堅調であり、引き続き良い方向に向かうとみている。

5 建設業**【景況感】**

- ・大手業者は都心の再開発ラッシュもあり好況である。県内でも工場や物流施設の新設ニーズは相応にあるが、資材の高騰や用地の不足といった問題から実際の受注に繋がっていないと感じる。
- ・公共工事、民間工事ともに堅調だが、好況という印象ではない。引き合いがあっても現場監督を始めとした人手不足から受注できないことが依然としてある。
- ・建築資材の価格が高騰する中でも、自社の住宅販売には特に影響はなく、景況感は普通。

【受注高】

- ・大口の公共工事を受注したことで、前期比で受注高は増えた。
- ・民間工事、公共工事ともに受注環境に変化はなく、売上高（受注高）はほとんど変わらない。

【受注価格】

- ・住宅部門は資材価格の上昇分を価格転嫁したことで単価は上がったが、全体的にはあまり変わらない。
- ・基本的に資材価格の上昇分を価格転嫁する方針としているが、直近ではほとんど変わらない。

【資材価格】

- ・木材、鉄骨、生コン等総じて高止まりしている。

【採算性】

- ・採算性はほとんど変わらない。
- ・民間工事は、工期中に資材価格が上がってもその分の金額変更（価格転嫁）をなかなか受け入れてもらえない。加えて業界全体の人手不足で外注費も上がっており、採算管理が難しくなっている。

【今後の見通し】

- ・好況でも不況でもない足元の情勢が当面続くとみている。
- ・今後の金融政策においてマイナス金利が解除されて住宅ローンの変動金利が上昇すると、住宅の買い控えが生じる懸念がある。